吉田知子

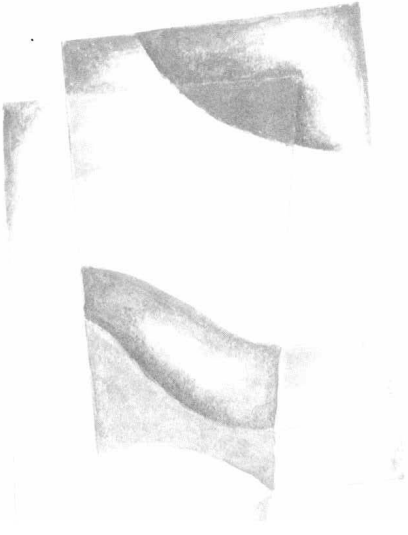
第五の季節

昭和世代女流短編集3

吉田知子

第五の季節

昭和世代女流短編集3



読売新聞社

第五の季節　昭和世代女流短編集3

著　者——吉田知子
編集人
発行人——大原規男
発行所——読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の十　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の十一　〒八〇二
印刷所——凸版印刷株式会社
製本所——協和製本株式会社
第一刷——昭和五十五年五月二十七日
定　価——九八〇円

©, 1980 Tomoko Yoshida
0093—702860—8715
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目
次

空気　7
オートバイ　41
角の家　77
彼岸窯　113
遡行列車　137
新しい家　149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母の手　161
女学生　173
五番目　199
あとがき　233
収録作品初出誌一覧　234
吉田知子作品年譜　235

装丁　栃折久美子

第五の季節

昭和世代女流短編集3

吉田知子

空気

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

何もかも空々漠々としている。

子供のないせいでこうなのだろうか、と美保は思う。夫もないのに一足とびに「子供」と考えてしまう。

夫や子供がほしいというわけではなかった。ほしければ当然いまごろは家庭の主婦になっているだろう。大部分の同級生のように、上の子は、もう高校生になっているはずである。自分に家事能力が欠けているわけではない。求婚者も今となっては、すべてを覚えてはいないくらいたくさんいたのだ。

それでは独身主義かといえば、決してそんなことはない。縁談の度に心が揺れ動き、求婚してくれた男には例外なしに好意をいだいた。結納というだんになって、なぜか気が進まなくなり、ぐずぐずして、ついに断ってしまう。当然、相手は納得しない。理由がはっきりしないので間に立った人とも気まずくなる。いつもそうに決っているので美保は三十を過ぎてからは、もう見合はしないことにしている。

要するに臆病なのだ、と圭子はきめつける。美保は笑って聞いている。そうかも知れない、と心の底で思う。

もっとも、美保に、そんなことを言うのは圭子だけである。美保は百六十九センチある。眉が濃くて目が大きい。鼻は高いし、口は薄くて長い。体は痩せているほうではない。着るものによってはかなり肥りぎみに見える。外観ばかりでなく、やっている仕事の内容も気が強くなければできない。美保は一応は会社の総務部に所属しているが、仕事は一人だけのものである。会社のために呼び屋のような仕事をして、結構会社に貢献している。企画立案宣伝人集めから、会場の選定、交渉、やってきた音楽家やタレントの世話、会計までやる。会社は各種機械の設計製作が本業の堅いところなのだが、上層部に派手なことの好きな重役がいるのである。一年に二、三回、多いときは四回も、そういう公演をやる。

本番が近くなってくると、経理や事務や雑用のため臨時に二、三人雇う。その他のときは美保一人である。だから、かばってくれる上役もなく、慕い寄る後輩もおらず、いつまでたってもお客のような感じである。仕事も仕事だが、そんな立場で平然と二十年近くも勤めていられるのは並の心臓ではない。それに美保は外人風の顔形なので同僚たちからも敬遠されている。

圭子のほうは色白の細身で目鼻も小作りだから、いかにもやさしく見える。ところが中身のほうは大したものである。美保のように空々漠々とはしていない。「自分の自由になる男がほしかった」から結婚し、「子供には興味がない」から作らない。「男は誰でも同じことで、それなら収入が多いほうがいい」というので夫は十四歳年上の鉄工業者である。その鉄工場は美保の会社の下請けでもあり、圭子は臨時雇いで美保の仕事を手伝ったことがある。来日した外国人音楽家の

送迎、通訳、宿舎や観光の世話をした。圭子は結婚前は東京でそういう仕事をしていたのである。年齢は圭子のほうが五歳下だった。

美保の空々漠々には、やるせない思いも混っている。半分半分である。恋にやるせないのではない。生きているのがやるせない。こんなことしてたってしようがないと思う。「こんなこと」というのは仕事のことではない。仕事も含めて、食べたり飲んだり寝たり。朝、目をさますと蒲団から起きること。寝ているだけだってやるせない。昔からそうだったが、若い頃は、そんな感じがしだすと、パッと旅行社へ行って外国旅行の申し込みをした。費用は、あとから稼ぐのである。あるいは、平生関心のない男とつきあった。相手が好きでもない男の場合、美保のやるせなさは少し鎮まるのだった。その奇妙な心理を分解すると「こうやって、したくもないことをして一生懸命生きているのだから、それでいいではないか」ということになる。美保のほうでは関心はなくても、男のほうは嬉しがって、いそいそしているのである。

いまの美保には、そういう適当な相手もいない。病気以来、急にとしをとった気がしている。病気といっても大したことではない。まる一日吐き続け、とうとう母や妹に連絡して入院したのだったが、結局原因不明だった。病院で三日間もいろいろ調べてもらっても、どうしてもわからない。五年に一度くらい同じようなことになる。三日目には美保はピンピンして食欲旺盛になる。

「おねえちゃんのは、お酒の飲み過ぎに決ってるよ」

と妹の佳代は言う。小学生二人、幼稚園児一人の子持ちの佳代は、げっそりとした顔をしてい

る。美保と姉妹とは思えぬくらい佳代は背も低く、痩せている。佳代のほうが病人に見えた。
「このごろは飲まないわよ。飲んだって自分の適量をちゃんと知ってるからね、二日酔いになんかならないもん。ガキじゃないんですからね」
母のお説教は佳代が先に帰ってからだった。
「こういうことがあるからさ、やっぱり旦那さんがいたほうがいいと思うだろ。これで寝ついてごらん、佳代だって、そうそう来れないもんね」
「いいわよ、お母さんが来てくれたら」
「馬鹿だね。私の死んだあとのことを言ってるんじゃないか」
「じゃあ、良子さんに頼むよ。もう子供が大きいから暇でしょ」
「だめだめ。あの人はおにいちゃんの嫁さんなんだから。あんただって良子さんの病気を本気で心配しないじゃない。ほら、去年、良子さんのお腹に結石ができてふた月も入院してたのに、佳代とあんたは一度ずつ来たきりだったじゃないか」
その通りだったので美保は笑いだした。美保は嫂(あによめ)の良子が嫌いではなかったが、病人のほうで気をつかい過ぎるので行きにくいのである。
あとになってから、母の説得ぶりに、どうもあまり熱意がなかったなと考えた。昔は母は結婚をすすめながら泣いたり怒ったりした。子供たちを皆結婚させなければ、私は死んでも死にきれない、どうしてあんただけふわふわしているのかわけがわからない、私はそんな子を産んだ覚え

はない、と言う。それじゃ、私は親孝行な子じゃない、と美保は、はぐらかした。
おにいちゃんと佳代のことは、もう大安心で、いつ死んでもいいんでしょ。私だけが心残りなのよね。そいじゃ、私がお母さんの長生きの原因じゃない。
風邪をひいたり、食あたりで二、三日寝ることもあり、それに較べて、まる一日二十四時間の奇病は話題にもならぬほどであったが、唾も飲めずに吐きっぱなしというのは、やはり体力を消耗する。ガクンと階段を一段おりたような気がする。この症状は五年おきぐらいではなかろうか。そうすると、この前が三十二、そのまた前が二十七歳のときということになる。一回目がいくつだったか覚えはないが、二回目はたしか三十二だった。原因不明というので少し不安になって美保は二泊三日の人間ドックに入り、そこで多田八郎と知りあったのだった。
その時の人間ドックの仲間は男が十人で女が三人だった。女の人は一人が五十前後、もう一人が六十くらいで、さかんに美保の「病状」を訊く。
「病院でもわからんというなら、よほどの難病ずらね。若いのに気の毒だね」
「どこが病めるのかい。よほど辛いんだろ、こんなとこへ来るようじゃ」
口々に、そんなことを言う。
「小母さんたちは、どうなんですか」
「わしらぁ、悪かないよ、どこも。だけどとしだからね。あちこち痛んでると思ってね。早目に手当てしとけば苦しまんで死ねるし。嫁にすすめられてさ」

「そうそ。ま、保養さね」
美保がどんなに弁解しても美保だけは何か重大な病気があると信じこんでいる。男たちからも同じ質問をされて、いやになってしまった。美保の「嘔吐病」に対する不安は極く淡いもので九十九パーセント健康だと信じていたし、実際その通りだった。
男たちは中老年が四人いて、あとは若い人たちだった。二十代の四人組は同じ会社らしく「落ちついて麻雀やりたいから来たんだ」とうそぶき、明方まで麻雀をやった。隣りの部屋の美保は大迷惑だったが、彼らと同室の八郎はもっと気の毒で次の日は赤い目をして欠伸(あくび)ばかりしていた。
心電図の順番を待っているとき、八郎が隣りにいたので美保は小声で言った。
「よくおやすみになれなかったでしょう」
「いやぁ、もうひどい目にあいました」
八郎の声は、うるおいのある低い声だった。例の連中に聞こえないよう小声で言うので秘密の話をしている気がした。
「同じお部屋なんでしょ。注意なさったらいいのに」
横目で見ると鼻が高い。ただ色の黒い太った男とばかり思っていたが意外に目鼻だちが整っている。
「そうもいかないんだな。そこが女と男の違うとこですな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com